

## 石川文洋のベトナム戦争

三 浦 雅 弘

### はじめに

第二次インドシナ戦争としてのベトナム戦争を、米国が1955年より直接援助を開始した南ベトナム政府に対して南ベトナム解放民族戦線が結成される1960年から、解放軍のサイゴン入城により南ベトナム政府が無条件降伏を余儀なくされる1975年まで続いた15年余りの戦禍と捉えることに大きな間違いはないだろう。その15年の間に、民間人は南ベトナムと北ベトナムを合わせて200万人以上が犠牲となった<sup>1)</sup>。ベトナム人兵士は、南ベトナム政府軍側で22万人、解放戦線と北ベトナム軍側で合わせて110万人が斃れている。南ベトナム政府軍側の兵士は、サイゴン正規兵、地方軍兵士、民兵の総計で優に100万人を越えていたが、米国からの派兵延べ数も15年間を通算すると250万人に達していた。その米兵の死者は6万人近くにのぼり、韓国軍ほかの同盟軍兵士からも5千人以上の死者が出ている。

ベトナム戦争において米軍の使用した弾薬量は1500万トンに近く、これは第二次世界大戦で米国が使用した総弾薬量の約2倍である<sup>2)</sup>。そのうち500万トンは、1968年および69年に投ぜられたという<sup>3)</sup>。

以上の数字からも、ベトナム戦争が第二次世界大戦以後に起こった戦争のうちでも最も危機的かつ破壊的なものであったことは疑いようがない。各国からジャーナリストや写真家が参集し、サイゴンの南ベトナム軍事支援米軍司令部(U. S. Military Assistance Command, Vietnam: 通常MACVと略称された)では広報官による記者会見が毎夕開かれた<sup>4)</sup>。米国はもちろん、英国やフ

ランスの通信社、新聞社からの特派員のほか、世界各地のフリーランサーも少なくなく、日本からやって来た石川文洋(1938-)もフリーランスの写真家であった。

ベトナムに長期滞在して取材した日本人ジャーナリストは写真家だけでも8名にのぼり、そのうちの4名を含めて日本人の写真家は15名が帰らぬ者となった。4年間ベトナムに滞在して困難な取材を続けながら幸運にも生還できた石川の作品群は、当時の日本人に現地の惨状を知らせるにとどまらず、戦後にはホー・チ・ミン市の戦争証跡博物館内に常設された写真展示室の中で、懸命に撮影された100点余りが見学者の訪れるのを待っている。

本稿は、ベトナム戦争に飛び込んで行った報道写真家の姿を紹介するとともに、特に石川文洋の作品のうちに、日中戦争時の沖縄生まれという石川の出自がいかに関与されているかを考察しようとするものである。

### I. 戦争写真家としての報道写真家

#### (1) 報道写真とは？

「報道写真」という言葉は、1934年に伊奈信男がフランス語の‘photo reportage’を邦訳したものとされ、伊奈によれば1929年にドイツの雑誌に現われたのが最初であるという<sup>5)</sup>。それが正しいならば、報道写真が確立したのは写真そのものの誕生から1世紀を経過した頃ということになる。桑原史成が述べているように、写真の原点が事実の記録性にあることを思えば、報道写真が生まれるまでに時間がかかり過ぎているようでもあろう。

だがその理由も、報道写真の需要が、米国の『ライフ』誌を代表とするグラフ・ジャーナリズムの勃興とともに飛躍的に高まったという事情から理解可能である<sup>6)</sup>。そして20世紀が「戦争の世紀」であった以上、グラフ・ジャーナリズムが何より生々しく伝えたのは戦禍であり、また、戦争が社会にもたらす混乱と不安であったこともいうまでもないだろう。しかし、一世を風靡したといえるグラフ・ジャーナリズムも、TV映像の普及とともに退潮を余儀なくされ、1936年創刊の『ライフ』も1972年には休刊に追い込まれている。その頃から今日に至るまで、報道写真あるいは報道写真家にとっては「冬の時代」が続いているというのは桑原の述べるとおりでであろう。

「現地報告」という訳語もある「ルポルタージュ」という言葉は、「報告者の主観を交えない」という語用論上の意味ももつと思われる。しかし『ライフ』が全盛を誇った頃の報道写真の典型的なスタイルのひとつは、明らかにその種のものではなかった。それは「フォト・エッセイ」と呼ばれたもので、代表的な写真家としてはユージン・スミス(1918-78)が挙げられる。写真家自身が作品にトリミングを加えることも辞さずに、多くの場合は一定の組写真によって自らの思いを表現するという「フォト・エッセイ」の手法では、複数の写真が撮影の時間的順番を前後させて配列されることも少なくない。日本のフォト・ジャーナリズム界においてその手法を駆使したことで知られたのは、1933年に日本工房を興して対外宣伝の先兵となり、戦後は1947年から2年間『週刊サンニュース』を率いた名取洋之助(1910-62)であった。

写真家自身によって、あるいは掲載する紙誌のデスクによって構成されたストーリーを表に立てる「フォト・エッセイ」は、メディアの公的な意思を報道写真によって表明する手段であった。少なくとも『ライフ』が休刊する以前においては、その種の報道写真は紙誌メディアの意思表示にとって決定的な力をもっていたといえるだろう<sup>7)</sup>。

1962年の暮れから東南アジアに滞在し、翌年7月から日本人ジャーナリストの中でもいち早く南ベトナム取材を開始した岡村昭彦(1929-85)も、「報道写真の興味が尽きないのは、写真家の思想や史観によって全く異なるエッセイが創られる」からだとして述べていた<sup>8)</sup>。

しかし報道写真が、ストーリー性を重視する組写真に尽きるものでないことはいうまでもない。ロバート・キャパ(1913-54)の盟友であったアンリ・カルティエ＝ブレッソン(1909-2004)は、「決定的瞬間」におけるワン・ショットをこよなく重視し、ノー・トリミングを原則とした。そして、戦場における「決定的瞬間」は、必ずしも銃弾が飛び交う中で撮影されるものでないことを初めて示したのがキャパだったと石川は述べている<sup>9)</sup>。石川によれば、スペイン戦争におけるキャパの写真、例えば「傷ついた少年を抱いている男」といった作品以前に、戦場の兵士の姿ではなく、ただ受動的に戦争に巻き込まれて行く民衆の姿が写し止められた「戦争写真」は存在しなかった。中国・漢口における1938年のキャパは、「燃えさかる家に水をかける主婦」等を撮影したが、その姿勢は生涯を通じて変わらなかったといっただけでよい。戦争の悲しみを痛切に感じさせるこのような作品を日本の従軍写真家が撮れなかったのは、軍部の検閲を恐れたことももちろんあるが、フォト・ジャーナリストとしての視点が欠落していたことが決定的であったと石川は考えている。

ところで、上に言及した作品以外にも、殉職する数日前の作品群にもあるような、子供を失って悲しむ墓地の母親の写真など、特定の人をクロス・アップ撮影したものはキャパには少なくない。そのような一種の「人物写真」は、通常的人物写真とどこが違うのだろうか。通常的人物写真は、あくまでその特定の人を十全に捉え、表現しようとするものである。しかし、例えば悲しむ母親を捉えたキャパの写真は、正確にはその母親個人の悲しみではなく、同じ状況に置かれたすべての母親の悲しみを、彼女を通して表現しているのであ

る<sup>10)</sup>。個別的な状況を通して普遍的な状況を知らせようとするのは、報道写真家の重大な使命のひとつである。

## (2) プレス・スタッフとフリーランサー

石川によれば、TV局等の動画撮影者を除くと、ベトナム戦争を取材した日本人写真家は41名であったという<sup>11)</sup>。彼らは、通信社や新聞社、または雑誌出版社のスタッフとして撮影した者と、フリーランスの写真家として撮影した者とに分かれていた。澤田教一(1936-70)は米国の通信社UPI<sup>12)</sup>東京支局のスタッフであり、峯弘道(1940-68)も同様である。一ノ瀬泰造(1947-73)は日本ではUPIのスタッフであったが、ベトナムではフリーランサーとして活動した。嶋元啓三郎(1937-71)は3度の渡航を、PANA<sup>13)</sup>通信社特派員、フリーランサー、『ニューズウィーク』誌契約写真家とその都度変更して取材に当たった。以上4名は滞在中に殉職している。

岡村昭彦は1962年にPANA通信社特派員となったが、1965年に南ベトナム解放戦線支配下の解放区内での取材を開始すると前後してフリーランサーとなっている。石川は、1965年1月から68年12月までのベトナムでの4年間を、一ノ瀬と同様にフリーランスの写真家として過ごした。

プレス・スタッフの仕事とフリーランサーのそれとは異なっているのだろうか。岡村は、プレスの専属ジャーナリストは「1秒を争う報道に酔い、血を沸かせるが、フリーランサーにはそれとは別の生きる道がある」と述べている<sup>14)</sup>。確かに、何の補償もないかわりに、行動範囲や滞在期間が本人の自由となるフリーランサーの利点は小さくないだろう。また、プレスの専属スタッフによるベトナムでの画像や映像については、撮影者のキャプションは添えられず、著作権も帰属せず、その名前すら明示されなかった。それに対して、フリーランスの大物写真家、デイヴィッド・ダグラス・ダンカン(1916-)やティム・ページ(1945-)ともなると著作権は彼らのものであり、その

作品群にTV映像は到底太刀打ちできなかったという<sup>15)</sup>。

多くのフリーランサーは、撮影済みのフィルムを切り売りして滞在費用を工面していた。石川は1か月にだいたい4つの作戦に従軍し、ひとつの作戦で5カットほどのフィルムを売っていたという。従軍時ではないが、例えば1968年1月の「テト攻勢」に続く、同年5月の南ベトナム全土122か所に亘る解放戦線の攻勢時、石川はサイゴン市街戦を撮影したフィルムを、説明を付けてAPサイゴン支局に持参している<sup>16)</sup>。APはサイゴンー東京支局間に毎日定期便があり、石川のフィルムを東京支局から読売新聞社へと回送した。石川はAPには白黒ネガ1カット当たり15ドル(当時のレートで換算して約5000円)で売ったが、引き伸ばし機にかける都合上その前後の2カットも含めて計3カット手放すことになり、フィルムに鉄を入れられる瞬間は身を切られる思いがしたという<sup>17)</sup>。苦しい滞在を強いられたフリーランサーたちの夢は、皆同じく、『ライフ』の誌面を飾ることだった。彼らはそれによって、写真家としての評価が揺るぎないものとなることを願ったのである<sup>18)</sup>。

第一次、第二次を通じてのインドシナ戦争で死亡した最初のジャーナリストが、1954年5月24日に地雷の犠牲となったロバート・キャパであることはよく知られている。1979年3月の最後の殉職者は日本人であったが、その日までに犠牲となったメディア関係者は約300名を数え、そのうち135名が写真家であったという<sup>19)</sup>。写真家の国籍は10か国に亘るが、日本人写真家の死亡は、第一次インドシナ戦争の当事国であったフランスのそれを越えて、ベトナム人写真家、米国人写真家に次いで多い15名にのぼった<sup>20)</sup>。

日本の報道写真家たち、特にそのフリーランサーたちは、なぜかくも多くベトナムに赴いたのだろう。当時のサイゴンには、米国のダンカンや英国のラリー・バローズ(1926-71:ラオスで殉職)といった高名な者も滞在していたが、写真家

の多くは無名の若者だった。恐怖の戦場に歩を進めるためには、真実を知りたいという探求心のみならず、若さゆえの野心や感傷が必要であったと石川は述べている<sup>21)</sup>。そして、ベトナムに来た理由は、戦場で人生を知ろうと考えたためだと、淡々と記してもいる<sup>22)</sup>。しかしもちろんそれだけのはずはない。意識に個人差はあったにせよ、日本人写真家にはベトナム戦争最大の後方基地としての「オキナワ」の存在は避けては通れない問題だった。石川の4年に亘る取材を可能にしたのは、戦火の中で、表現し切れないほどの哀しみや怒りを抱えて日々の生活を送っているベトナム人たちとともに生きているという実感だった<sup>23)</sup>が、そのような共感も、石川が沖縄出身であることによっていっそう強められていたに違いない。

さらに加える必要があるかもしれないもうひとつの要素は、写真映像のもついわば本質的な「魔力」のようなものである。理解が不可能なまでに残酷・悲惨な戦場の光景を捉えたワン・ショットがもつ比類ない衝撃——その一瞬を希求して、写真家は自ら進んで危険に満ちたフィールドに歩を進めるという事実があるのではないか。

### (3) 取材に対する米国の対応

石川は1965年から68年まで、南ベトナム政府軍と米軍に従軍する形でベトナム戦争最前線における長期取材を敢行した<sup>24)</sup>。米国がこれまでに関与した幾多の戦争において、ジャーナリストの出身国の如何に関わらず、長期に亘って自由に最前線まで取材することが許可されたのは、後にも先にもただベトナム戦争のみである。数多くのジャーナリストの生命が失われたことの原因の一つは、彼らに最前線の取材が認められていたからである。ジャーナリストの出身国による差別は一切なく、写真家も撮影済みのフィルムをチェックされることなどは皆無であった<sup>25)</sup>。ジャーナリストに対する米軍の協力は、基地でも前線でも最大限に惜しみなく発揮され、米軍兵士は生命を懸けてジャーナリストの前線での移動を助け、たと

え米軍にとって不利な写真の撮影であっても決して妨害はしなかったという<sup>26)</sup>。

米国側の厚い待遇に対して、日本の自国ジャーナリストへの対応はどうだったか。石川によれば、サイゴンの日本大使館ではフリーランサーは冷遇されたという<sup>27)</sup>。石川は日本にいた頃に、最初のキャリアを動画映像の撮影者としてスタートさせていた。動画撮影のプロであったことから、1965年に日本の民放TV局の依頼でベトナム海兵隊を3週間取材したことがあった。その映像は「ノンフィクション劇場」という番組で三部作として放映される予定であった。ところがその第一部「南ベトナム海兵大隊」の中の、海兵隊兵士が解放戦線捕虜の首を切る場面が問題とされ、放映後に日本政府が介入して続編の放映は打ち切られた<sup>28)</sup>。この事態を石川は、日本政府の米国への遠慮の結果と捉え、日本の国家としての独立性に疑問を抱いている。石川がスタイル写真家に転じたのはこの事件が契機であった。

## II. 石川文洋の視線—沖縄からベトナムへ

### (1) 写真家の視線

写真家は目に見えないものを撮ることはできないが、目に見える現実はそのすべてを被写体とすることができる。無尽蔵に存在する対象から何かを被写体として選んだところで、その何かに向けてカメラのシャッターを切る瞬間も無数にありうるだろう。写真家が「作家」として「作品」を生み出しうるのも、つまるところ写真家各個が見ようとする現実があり、それが写真家の個性によってさまざまであるからにはかならない。われわれがいわゆる「ストレイト・フォトグラフィー」に感動することがあるのも、多くの場合撮影者の視線に心を動かされるからである。

1938年に那覇に生まれた石川文洋は、幼時に沖縄を離れて以後18歳になるまで帰郷していないので、1945年4月に始まり3か月続いた沖縄本島を中心とする日米の苛烈な地上戦を体験して

はいない。しかしそのときに学齢期に達していたことは、世界に対するその後の石川の視線を決定するのに十分であったように思われる。石川は、今日残されている沖縄戦の写真が米国人の従軍写真家によって撮られたもののみであり、日本人の写真家が戦争に巻き込まれた民衆の姿を撮れなかったことに痛恨の念をもっている<sup>29)</sup>。また、ベトナムでは何度も進んで南ベトナム政府軍に従軍するという経験を積んでいることは先述したとおりである。報道写真家が現地を訪れる前に現地語を習得することは容易でなく、石川もその例外ではなかったであろう。普通に考えれば、英語を用いることでより取材のしやすい米軍への従軍を優先しそうであるが、石川はなぜそうしなかったのか。そのような石川の思いや行動は、沖縄という出自をもち、そこから生まれた視線を考慮してはじめて理解可能となるのではないだろうか。

## (2) 沖縄とベトナム

極めて大づかみに沖縄の歴史を日本との関係において要約すると以下のものである。古代国家としての沖縄、すなわち琉球は、日本という国家の枠組とは別個独立に形成された。ところが、1609年（慶長14年）の島津の侵入によって、日本の幕藩体制に編入させられ薩摩藩の支配下に置かれる。とはいっても、琉球という国家形態は失われず中国（清）からの冊封は維持されたため、形式的には「日清両属」となった。日本の政体変化に伴う1872年（明治5年）の琉球藩設置から1879年の廃藩・沖縄県設置に至る「琉球処分」の過程で、琉球は日本に併合される。しかしながら、その後の沖縄は、日本政府によって「辺境」として放置され続けたといつてよい<sup>30)</sup>。

先に述べたとおり、太平洋戦争末期の1945年4月には米軍が上陸して凄惨な地上戦が繰り広げられた。その死者数は兵士と市民を合わせて12万人を越えたという<sup>31)</sup>。戦場とされた沖縄の人々の心情には、「内地人」には理解の及ばないところがあると石川は指摘している<sup>32)</sup>。

戦後、大陸において中華人民共和国の路線が軌道に乗り始めるとともに、沖縄では米軍基地の建設が本格化され、朝鮮戦争を経て1952年に結ばれた対日平和条約の第三条で沖縄は日本から公式に分離される<sup>33)</sup>。20年後の1972年5月に沖縄は返還されるものの、米軍基地の自由使用権存続がその前提条件として容認されたため、今なお各地に広大な基地が維持されているのは周知のとおりである。その間に激化した第二次インドシナ戦争としてのベトナム戦争において、沖縄とベトナムは太いラインで結ばれるに至る。

ベトナムに目を転ずるならば、日本がベトナムに進駐するという形で関係が生まれるのは1940年のことであるので、当然ながら両国関係の歴史は浅い。ベトナムは10世紀に最初の民族王朝が成立するまで、1000年の長きに亘り中国の支配下に置かれてきた。17世紀におおよそ今日のベトナム領土が画定したが、1847年にはフランスの侵略が開始されている。1887年には仏領インドシナ連邦の成立が宣言され、フランスの植民地とされるが、1940年のドイツによるフランス本国占領という事態を受けて、日本軍が仏領インドシナに進駐する。日本による仏軍武装解除が行われた1945年3月には、実質的には日本軍の管理下にバオ・ダイ帝がベトナム帝国の「独立」を宣言するものの、同年9月の日本による降伏文書調印と同日に、ベトナム民主共和国の樹立が宣言され、ホー・チ・ミンが初代国家主席に就任した。

しかし翌年には巻き返しを図るフランスとの間に第一次インドシナ戦争が発生し、ベトナム側の抵抗によってフランス側拠点のディエン・ビエン・フーが陥落して第一次の戦争が終結するのが1954年のことであった。このときジュネーヴ協定に調印しなかった米国は、翌55年1月より南ベトナム（同年10月に「ベトナム共和国」として分離独立）への直接的援助を開始する。南北の戦火が続く中で、1963年11月には在沖縄米軍のベトナム派兵が始まり、沖縄とベトナムが結ばれることになる。

1964年8月、米艦マドックスおよびターナージョイに対して北ベトナム海軍の魚雷艇が攻撃を仕掛け、マドックスに対しては再度の攻撃があったことを米国が発表するという「トンキン湾事件」が起こる。米軍は直ちにその報復措置として、ベトナム近海の航空母艦より、北ベトナム爆撃、いわゆる「北爆」を開始するが、後に米紙「ニューヨーク・タイムズ」が国防総省の秘密文書を入手して、2度目の攻撃は米国側のでっちあげであったことが暴露されるに至る<sup>34)</sup>。その後のベトナム戦争の泥沼化は、短期間における米兵数の急激な増大にも窺えよう。1965年1月の時点では、南ベトナム政府軍の兵士60万人（対峙する解放勢力は21万人）と行動をともにする米兵は2万7千人に過ぎなかったのに対して、同年6月には12万人、翌66年には50万人を突破し、最多の時期には55万人にまで膨れ上がっている<sup>35)</sup>。その間に沖縄が、米兵の訓練、休養、負傷兵の治療、物資の補給等に最大限活用されたことはいままでもない。

要約するならば、沖縄とベトナムは、中国をはじめ他国による支配が長きに亘ったことと遠方の米国から軍隊が押し寄せたことの二点において共通する歴史を有している。日本の「内地人」の沖縄に対する理解の限界を痛感した石川が、沖縄と通ずる歴史をもつベトナムの民衆に思いを寄せたことは想像に難くない。その思いが、1965年から4年間に亘る南ベトナム取材、そして1972年の北ベトナム取材を可能にしたとみて大きな間違いはないだろう。ちなみに同年秋に本多勝一とともにいった西側の新聞社から訪れた最初の写真家としての北ベトナムの取材によって、その後石川はベトナム戦争終結まで、南ベトナムの地は踏めなくなってしまった<sup>36)</sup>。

### Ⅲ. ベトナム戦争の兵士たち

#### (1) ベトナム戦争の特異性

生井英考によれば、ベトナム戦争には「前線」

がその厳密な意味では存在しなかった。米軍からすれば、自軍が制圧した地域はせいぜい「点」としてしか地図に記すことはできず、決して「面」を描くことはなかった<sup>37)</sup>。なぜなら、敵の解放戦線兵士がどこにいるか正確に把握することは不可能だったからである。したがって、補給ラインも空路に頼らざるを得なかった。この事実は、ベトナム戦争が本質的に「ゲリラ戦争」であったことを物語るものである。武力や兵力が正面衝突した太平洋戦争などとは打って変わって、ベトナム戦争では、敵から攻撃をかけられないかぎり敵の存在場所すら不明であった。石川文洋も、解放戦線兵士が移動したり戦闘したりしている姿を、4年の間に一度も目にしていない。実際に目撃したのは、その死者と捕虜のみであったという<sup>38)</sup>。南ベトナム政府軍や米軍の兵士が、姿の見えない敵を相手にし続けることに疲労困憊していったことは想像に難くない。

#### (2) 米軍の兵士たち

石川文洋の従軍記は、石川の南ベトナム政府軍兵士および米軍兵士との交流の記録として比類のないものである。石川がベトナムの地を踏んで間もなくのうちに米軍の本格的な大量派兵が開始されたわけであるが、それ以前に派遣されていた米軍アドバイザーの多くは、基本的に優秀な大尉の地位にある者たちだった。ベトナムの戦場は、ある時期まで米兵士たちから「大尉の墓場」とまで呼ばれていたという<sup>39)</sup>。その米軍大尉たちが行軍をともにするベトナム兵たちは、ベトナム人のライフ・スタイルを決して変えようとしないうようなところも少なからずあり、例えば戦闘中も食事や昼寝をすることは躊躇しなかったという。米軍アドバイザーと政府軍兵士との間には、そのような生活感覚や職業意識といったものにおける違和感も存在したし、アドバイザーからすれば、米国がベトナムに領土的野心を抱かずもなく、ただ東南アジアが共産主義の支配下に陥れられないためには、ベトナムを防波堤として死守するしかない

という当然の信念ないし使命感で働いているに過ぎないわけであった。石川が、米兵との間にはどうしても理解し合えない何かを拭い去れなかったと語る<sup>40)</sup>一方で、アドバイザーの米軍大尉たちに同情を禁じ得なかったことは理解できるだろう。

1965年半ばから66年にかけて米軍の出兵が大規模化するわけであるが、上述の米軍アドバイザーたちを除くと、「在ベトナム援助軍」といながらも、一般の米兵には南ベトナム政府軍兵士と接する機会はほとんど存在しなかった<sup>41)</sup>。生井によれば、1961年1月1日から74年4月13日までにベトナムで死亡した米軍兵士の総数は56555名であるが、その6割近くの33091名が19歳から21歳の兵士であったという<sup>42)</sup>。徴兵されてベトナムの地上勤務となる米兵の平均年齢は19歳であった<sup>43)</sup>。戦闘経験は少なく、高温多湿の環境への順応力も低い若い兵士たちが、空輸によって前線に運ばれ、突然ゲリラ兵に襲撃されることすらあるという過酷な状況が、自暴自棄な気分を誘発して、時として残虐行動に走らせるという構図も想像に難くない<sup>44)</sup>。そのような米兵の行動には自負や名誉の念の欠如も窺えようが、そもそも兵士における「祖国防衛」という思いの有無が、第二次世界大戦とベトナム戦争とを分け隔てていることは石川の指摘するとおりであろう<sup>45)</sup>。

石川は米兵の中に、1946年に那覇で生まれた一世の土池敏夫一等兵を見出している<sup>46)</sup>。すぐに打ち解けた二人の間では、沖縄、米国、ベトナムをめぐって熱いやりとりがあったことだろう。土池は、米軍基地の中に埋没してあるような沖縄の暮らしを捨てて米国に移住し、通常1年の兵役を3年積み米国市民権が取れることを期待して入隊していた。しかしベトナム勤務になるとは思っていなかったという。この予想違いは特段不思議なことではない。徴兵ないし志願によって国内で訓練を施された後、ベトナムに派遣された米兵は、米国の徴兵対象年齢男子総数のわずか6%に過ぎなかったからである<sup>47)</sup>。沖縄を脱出した先の世界に自由を求めた土池は、石川と語らったその2か

月後に、20歳を目前にして帰らぬ人となった。

沖縄出身の日本人米兵は数の上では少なかった。米国は単独での戦争介入という印象を避けるために「自由同盟世界軍」を構想したが、その兵員数は、1970年の時点で、韓国、タイ、オーストラリア、ニュージーランド、フィリピン、中華民国、スペインの順に多く、中でも韓国軍は67年6月の時点で45000人を数えて米軍の1割に達し、米国は大きな期待を寄せていた<sup>48)</sup>。1950年に勃発した朝鮮戦争のために、韓国兵の共産主義への憎悪は心の底からのものと映り、米兵のごとく観念的なものではないと石川は感じたという<sup>49)</sup>。

### (3) 南ベトナム政府軍の兵士たち

南ベトナム政府軍を構成していたベトナム共和国陸軍は「勇猛」を越えて「凶暴」とすら見なされていたが、石川は彼らに従軍することも敢えて辞さなかった。事実、彼らの行動の記述には目を背けたくなるようなくだりも散見するが、残虐な行為に走るベトナム兵個人を、米国政府や南ベトナム政府に操られる殺し屋だと言い切ることに石川は逡巡を覚えている<sup>50)</sup>。そして他方において、尋常でないほどの死への恐怖を抱き、死を恐れずに戦うほどの信念を持ち合わせてはいない政府軍兵士に同情を隠すこともない<sup>51)</sup>。政府軍兵士には、莫大な費用を費やしている米国と、生命を賭している米兵とに対して、自国の戦いを援助してくれていることへの感謝の念は希薄だった。米国は自分たちから離れて勝手な戦争を続けていると見なしているというのが、石川が政府軍兵士との交流から得た観察の結果であった<sup>52)</sup>。

ベトナム戦争を「間違った戦争」と捉え、米国の権力者たちには強い怒りしか感じていない石川は、解放戦線を「敵軍」とは到底考えられなかった。しかし、解放戦線と対峙する南ベトナム政府軍兵士の一部の者には、ほとんど友情といってよい得がたいものを感じていたという<sup>53)</sup>。何とか1年間を無難にやり過ぎて帰国しようと思いを一にする米兵と、1946年から戦い続け、今なお戦

火の収まる日が見えない状況を静かに耐えようとするベトナム兵との対比的なありようを、石川はそれぞれの将校クラブの様子相違にも見出している<sup>54)</sup>。

南ベトナム政府軍の末路は憐れだった。「ベトナム戦争のベトナム化」による「名誉ある和平」を図った米国大統領ニクソンは、1972年1月には米兵人員数を15万人にまで縮小させている。その一方で「北爆」を激化させながらも、北ベトナムと極秘の停戦交渉を続けていた<sup>55)</sup>。ニクソンは73年3月に一方的なベトナム戦争終結宣言を発するとともに、駐留米軍の撤退を完了させている。米国の直接的支援を失った南ベトナム政府軍は総崩れ状態となり、同年の兵員戦死者数は、「テト攻勢」に曝された1968年に次いで多い25000名余りを数えた<sup>56)</sup>。翌74年の脱走兵士の数は、過去最高の24万名にのぼった。ニクソンの思い描いた「ベトナム化」は完全に破綻したとあってよいだろう。

#### IV. 石川文洋のベトナム戦争写真

##### (1) 澤田教一、一ノ瀬泰造、そして石川文洋

スティル写真家に限っても、生命を懸けてベトナム戦争の真実をシュートし続けて、世界的な評価を得た日本の報道写真家は五指に余るだろう。いちはやく日本を発って現地入りし、1965年の春から夏にかけての53日間を解放区で取材した岡村昭彦を嚆矢として、石川文洋より2歳年長の澤田教一、9歳年下の一ノ瀬泰造の仕事などはよく知られている。

澤田の作品への高い評価は比類がないかもしれない。1965年、爆撃を逃れて川を渡る二組の親子を捉えた「安全への逃避」は66年度のピューリッツァー賞を受賞し、68年1月の解放軍による「テト攻勢」ではユエ攻防戦という戦場写真の迫真の傑作をものにし、さらに71年には、カンボジア難民の労わりを収めた70年の作品でロバート・キャパ賞を歿後受賞した。撮影に従事で

きた歳月こそ短かったものの、D. D. ダンカンやラリー・バローズ (1926-71)、ホースト・ファース (1933-2012) らに勝るとも劣らない傑出した戦争写真家であるといっただろう。澤田の作品が見る者の心を揺さぶるのは、撮影者の「難民家族への視線」のゆえであると平敷安常は記している<sup>57)</sup>。

一ノ瀬泰造は、日本大学芸術学部写真学科を卒業後の1972年7月にカンボジアに入国し、ベトナム戦争末期のベトナムおよびカンボジアで取材を続け、翌年11月にアンコールワットに潜入したあと行方不明となったが、クメール・ルージュに殺害されていたことがやがて判明した。写真を専攻しただけに、当時の南ベトナム大統領、グエン・バン・チュー、カンボジア大統領、ロン・ノル、ベトナム援助軍司令官・米国陸軍参謀総長、ウェストモランドらを被写体とした一ノ瀬の肖像写真には確かな技術が感じられる。また、年若いアジア人写真家にレンズを向けられて、ベトナムやカンボジアの人々、特に若い女性や子供などには、非常にリラックスした表情を見せている者も少なくない。そして、結果的に一ノ瀬の生命を投げ出させたことに繋がったかもしれない、大胆不敵とも思える挑戦心や行動力の所産としての、激戦のフィールドで撮影された作品群のもつ迫力は並大抵のものではない。

1930年代、ロバート・キャパは、自国の軍事独裁政権を逃れ、「米国の写真家」と称して報道写真の撮影を開始した。その後ハンガリー出身という事実を楯にいわれのない嫌疑を受けて、旅券の支給等での苦労は味わったものの、第二次世界大戦中は基本的には志を同じくする軍隊に従軍したといえるだろう。

石川文洋は当時離れていたとはいえ、郷里の沖縄は米軍に上陸されて国内で唯一の白兵戦の地となった。それによって後世まで残された沖縄の人々の憤怒や怨恨は、ただ米軍に対するものに止まらなかったことは周知である。戦時に日本軍部が現地の人々に振るった横暴非道な行いや、それ



に続いた数々の悲話は枚挙に遑がない。戦後日本のいわゆる「高度経済成長」は、沖縄に広大な軍事基地を維持することを容認する代償として、米国からいわば最恵国待遇を受け続けた結果である。

アジア人として、同じアジアの小国を蹂躪する米国の権力者への怒りを石川がもたなかったはずはもちろんないが、その一方で、ベトナムでの自由な撮影を大らかに認可する米国や、従軍中は気さくにサポートの手を差し伸べてくる米兵への気持ちは、怒りとは隔たったものだったろう。ひとことであって、沖縄出身の石川の視線には、ブダベスト出身のキャパのそれを遥かに越えた屈折があったはずである。

石川文洋のベトナム写真を具体的に検討するに当たり、ここでは1971年に朝日新聞社から刊行された『写真報告 戦争と民衆』を取り上げる。先述のとおり、石川は現地でも撮影済みのフィルムを通信社等に売って生計を立てていたため、この写真集も石川の手許に残された作品群から作られている。あらかじめその構成について述べておくと、『写真報告 戦争と民衆』は全部で6つの見出しをもってカテゴライズされている。そのうち、ベトナムに派遣された米兵の行動にまつわる群は、「ベトナムのアメリカ兵」、「ひとつの村の出来事」、「戦火の中の民衆」の3つであり、南ベトナム政府軍の行動にまつわるのは、「憎しみ殺しあう同胞」である。残る2つは、1968年5月5日の解放戦線によるサイゴン総攻撃取材した「市街戦」と、「虐殺・カンボジア ラオス」である。

## (2) 「ベトナムのアメリカ兵」

開巻劈頭に掲げられている「ベトナムのアメリカ兵」の最初の作品には、「激しい銃声が止まった後に、おそろしいほどの静寂が残された。ギラギラと光る太陽の下に倒れた少年の身体から流れ出る血は土に吸い込まれていった」というキャプションが付されている<sup>58)</sup>。作品の左寄り下方にあどけないと言ってよいような静かな死に顔をした少年が横たわり、その上方に7人の銃を構えた米

兵が立っている。彼らの表情は判然としない。表情が捉えられているのは、右方手前に大きく写された横向きの兵士である。この作品で表情が窺えるのは、倒れた少年とこの兵士のみである。少年の静かな死に顔を見下ろす兵士の眼は虚ろである。その胸に去来したのはどのような感情だったのか。殺された少年以上に、殺した側のこの兵士の表情が写し止められたことに、この作品の深い意味が宿っている。

その10頁ほど先に、同じく見開きに渡って、「カンボジア国境付近の湿地帯。待ち伏せ作戦を受けた解放戦線の分隊が全滅した。散乱した死体とむせかえるような血のにおいの中で、兵士たちはむしろ楽しそうだった」というキャプションの付された作品がある<sup>59)</sup>。横たわる死体は四体、米兵は死体のそばに立つ者が4名、少し離れて座り込んでいる者が1名、立っている米兵のうち3名は笑みを浮かべている。5名と4名の兵士間の戦闘であったという数字上の事実よりも、それぞれの装備が格段に違うことに目が引きつけられるだろう。解放戦線兵士はあくまで「ゲリラ」であって、正規軍の兵士として組織的な訓練を受けていようはずもない。米兵を相手にいわば個人的な戦闘を挑んでいたといえるかもしれない<sup>60)</sup>。従軍中の石川も、彼らが武力で米軍に勝ることは不可能であり、ディエン・ビエン・フーの再現はありえないと考えていた。彼らにとって唯一の勝機は、頑強な抵抗によって戦いを引き伸ばし、米軍の疲労とそれに続く内部崩壊を待つことしかなかった<sup>61)</sup>。

「ベトナムのアメリカ兵」に収録されている作品の中には、米兵が人間の顔を取り戻した一瞬を捉えたショットもある。負傷して捕えられた解放戦線兵士の手当てをしている米兵の写真には、「戦闘のあと、捕虜に水やタバコをやる、こういった光景はよくある」というキャプションが添えられている<sup>62)</sup>。負傷して横たわるゲリラ兵の頭や腕や足には、粗末ながらも包帯が巻かれ、その頭上にはしゃがんだり立ったりしている3名の

米兵がいる。点滴の壺を掲げている米兵の顔に笑みはない。

用水の流れの畔で、機銃を足元に置いたまま寝そべってペーパーバックを読んでいる米兵のショットがある<sup>63</sup>。「戦場には、おそろしいほど静寂な時間がある。そんなとき、兵士たちは自己を取り戻すようであった」というキャプションの付されたこの作品と同じときに撮られたカラー写真が、石川の別の著作に収められており、そこには、「好きな作家はヘミングウェイ」というキャプションがある<sup>64</sup>。石川自身も戦場に流れる静かな時間をこよなく愛し、そのようなときにはノーマン・メイラーの『裸者と死者』の文庫本を繰り返し読んでいた<sup>65</sup>。ポロポロになった1冊の文庫本を何度も読み返す石川の姿に、平敷安常は強い印象を受けている<sup>66</sup>。

さらに数頁先には、立ち並んで頭を垂れ、携帯用に薄く剥がされた『聖書』に目を落とす米兵たちのショットがある<sup>67</sup>。「こんなところにもと思うほど、日曜日には前線まで神父（牧師？）がヘリコプターでやってくる。生と死がうらおもての戦場のミサに兵士も真剣だ」というキャプションが添えられている。海外出兵に際して、いつからか米国の背には、軍事力と経済力に加えて宗教が負われているのかもしれない。

### (3) 「ひとつの村の出来事」と「戦火の中の民衆」

「ひとつの村の出来事」という見出しの下に収められた8枚の写真については、キャプションは最小限に切り詰められており、詳細な説明は、村人のその後を追った取材も加えて、2005年に刊行された『ベトナム 戦争と平和』に記載されている<sup>68</sup>。1966年12月、石川は米25師団一個中隊の6名の兵士とともにヘリコプターを降り、「解放区」を疑われたある村を彼らが急襲するのを目の当たりにする。1名の農夫が銃弾に倒れ、呻き声の漏れてきた壕の中には手榴弾が投げ込まれて1名の農夫が殺害される。その壕の中から銃が発見されるにおよび、米兵たちは勝鬨を挙げて

重傷を負わせた農夫を連行して行く。死傷したふたりの農夫は上半身裸でももちろん武装などしておらず、重装備した米兵との隔たりは無限に大きいものと映る。連行される農夫には幼い娘があった。凍りついたような正面からの彼女のショットは、後に「戦争を見る瞳」として石川の代表作のひとつとなる。石川は25年後の1991年に、心に深い傷を負い続ける彼女を探し出して取材している。

「戦火の中の民衆」に区分されている作品群には、石川が米第一騎兵師団の「デヴィ・クロケット作戦」に従軍した1966年7月、ベトナムのビンディン省ボンソンで撮影されたものなどが含まれている。その作戦時のショットには、「米軍は小さな部落を徹底的に攻撃した。地上からは105ミリ砲と迫撃砲が撃ち込まれ、空からは2機のジェット機が爆弾を落とし、次にナパーム弾を落として村を火の海にし、続いて機銃掃射を加えた。それが終わると、兵士たちは機銃とライフルを撃ちながら部落へ突入した」という文章が添えられている<sup>69</sup>。

この見出しの下の40頁に亘る作品群には、農婦や子供のショットが少なくない。戦車の上で4名の米兵が一休みしている。2名の兵士は煙草を啜っている。その手前を農婦たちが、まっすぐ前方を見つめ、背筋を伸ばして通り過ぎて行く。4人の農婦のうち最後の者は幼児を胸に抱き、そのさらに後ろには籠を下げた少女が従う。石川のキャプションも言葉少なめである。「米兵を無視することが、彼女らの抵抗でもあるかのようには黙々と通り過ぎて行った」<sup>70</sup>。煙草を啜っているために口元が歪んでいたり、口が半開きになったりしている年若い米兵たちは、到底彼女たちの敵ではないように映る。その数頁先にある写真はややユーモラスである。湿地の中を老女が胸を張って先頭に立っている。その後を米兵二人がつき従うように歩いており、前の米兵は男の子を胸に抱いている<sup>71</sup>。

まだ乳児だろうか、幼い子を横抱きにしながら土間の藁に座っている若い農婦のショットがある。

壺を手にかけているので、わが子に食事をさせているのかもしれない。集落へ押し入って来た米兵を見上げる眼には、恐怖を押し返そうとする母親の勁さが籠っているように思える<sup>72)</sup>。

重傷を負わされて病床に横たわる子供たちの姿の痛ましさは言いようがない。「1966年2月、メコン・デルタのカントーで、米軍が〈誤射〉と発表したヘリコプターからの機銃掃射で、多くの生命が傷つき奪われた。右腕と右足を失った子と父」。娘も父も口を結んでレンズを凝視している<sup>73)</sup>。

#### (4) 「憎しみ殺しあう同胞」

ここに収められた作品群は、その見出しのフレーズに釣り合った衝撃を見る者に与えずにはいない。紹介文は次のように始まる。「南ベトナム政府軍に従軍していると、兵士たちの多くの親切にあった。銃弾が飛んでくると安全な場所を探して押し込んでくれ、食事の時間になるとあちこちから食べに來いと誘ってくれた。雨が降ると、自分のカップを脱いで貸してくれることもあった。そんな彼らが、捕虜を連れて来ると突然と野獣のように変わり、残酷非道な拷問をするのを見た。／解放区の農村では家に火をつけ、砲弾をたたき込み、彼らは自らの手で同胞を殺し、国土を破壊し続けている」<sup>74)</sup>。同じ民族の間でも、煽り立てられた憎悪の炎が燃えさかる姿は、異なる民族の間と変わりのないものだろうか。

「兵士は壕の中へ手榴弾を投げ込もうとした。両親はそれを止めて中の子供を呼んだ」というキャプションの付されたショット<sup>75)</sup>。学童期の男の子が壕から顔を出した瞬間であろうか。取り囲む兵士4人のうちひとり銃を構え、農婦はしゃがんで声をかけている。農婦とその傍らに立っている夫の年恰好からして、男の子の祖父母かもしれない。絶体絶命の危機を脱した直後の安堵感が、男の子の表情や兵士の後姿から漂ってはいるが、ほんの一瞬の差で子供の生命は絶たれていたかもしれない。

捕縛された解放戦線兵士のショットがある。「サイゴンの市街戦で捕えられた解放戦線兵士と政府軍兵士」<sup>76)</sup>は、ジープの上か何かであろうか、前後ふたりの迷彩服姿の政府軍兵士は顔に笑いを浮かべ、挟まれた捕虜は目隠しをされて底知れぬ恐怖にすくんでいるように見える。ピントは、捕虜の後ろの、ベレー帽を被り、銃を掲げている兵士の笑顔にある。背後から厳しい視線を投げかけるふたりの男が後方に見え、そのふたりの間には、背を向けて歩み去る男がいる。さらに後方の民家の前で、家族5人が直立してじっと見つめている。見つめる者たちは、歩み去る者は、何を望んでいたのだろうか。「解放戦線兵士を拷問する政府軍兵士」<sup>77)</sup>の拷問者側は4名、右から二人目の兵士はしゃがんで捕虜に話しかけているようであり、尋問役であろうか。左側2名の政府軍兵士が実際の拷問を下しているのか、手を下していないように見える右端の兵士は横顔に笑みを浮かべている。横座りにされた捕虜の顔面は鮮血に染められている。

政府軍兵士たちが石川のレンズに向かって笑顔を投げかけている一枚がある。「政府軍は家族と一緒に行動することが多い。前線の小さな基地に、妻と子が昼飯を運んで来た」<sup>78)</sup>。左側に3人、右側にふたりないし3人の兵士が、むき出しの地面の上で食事をともにしている。米飯、惣菜、スープだろうか、3つの金属製の容器が並べられ、左側手前の兵士は顔の前に碗をもち、後ろのふたりとともに穏やかな笑みを浮かべている。右側正面向きの兵士は、缶詰を直接口に運んでいる。兵士たちの背後には、妻がふたり微笑んで立ち、左の妻は男の子を連れ、右の妻は幼女を抱いている。男たちは、妻や子供たちに、捕虜の拷問をする姿を見せただろうか。

#### (5) 石川文洋の視線

ベトナムにおける石川の撮影機材は、カメラ・ボディがライカM2とニコンFで、前者には広角域の2本のレンズ、後者には35ミリの広角のほ

かに105ミリと200ミリの望遠レンズが装着されていた<sup>79)</sup>。フィルムは、モノクロームがコダック・トライX、カラー・ポジがコダック・エクタクロームであった。長期滞在取材の最後の年となった1968年には、ライカM2には35ミリ、ニコンFには105ミリと200ミリのレンズを付けることが多かったようだ<sup>80)</sup>。この装備は澤田教一とまったく同じであった。

いうまでもなく4年間の歳月に亘って撮影されたフィルムの量は膨大であり、数え切れぬシーンや人物がシュートされたはずである。しかし、夥しいカットを見続ける者の目には、石川の作品群にひとつの際立った特色が見えて来るのではないだろうか。それは、戦場のあるシーンを捉えたショットも、そのシーン中の当事者の表情を捉えようとしたものが多いという特色である。105ミリの望遠レンズなどは、そのような撮影意図によく適ったものではないか。そして「当事者の表情」とは、さらに突き詰めれば、戦争に巻き込まれた人々の表情であり、それは民間人のそれにとどまっではない。石川が行動をともにした米兵も南ベトナム政府軍の兵士も、そして捕縛されたり骸となったりした解放戦線兵士も、戦争に巻き込まれた者なのである。石川が求め、シュートし続けたのは、米兵も政府軍兵士も当然に併せ持っていた、普通の人間がもちうる多様な表情だったのであり、それを通して自らが触れることのできた戦争というものを世界に知らせようとしたといえるのではないだろうか。

平敷安常によれば、彼と現地で交流のあった少なからずの日本人写真家のうちで、岡村昭彦と石川文洋のふたりが、ベトナム戦争当事国の米国に対して明瞭な批判の眼をもっていたという<sup>81)</sup>。今日のわれわれからすれば、これは少し奇異に聞こえる意見かもしれない。ベトナム戦争を、米国という軍事・経済大国がアジアの小国を蹂躪するものと認識しなかった写真家はいなかったであろうからである。しかし、一方の当事者の軍隊に従軍し続け、さまざまな体験を積み、さまざまな光景

を見るうちに、現地入りする前の確固とした認識と思えたものが次第に揺らいで来るということは十分想像可能であり、自身について語る平敷の筆致からもそのような印象を受ける。前述のとおり岡村昭彦は、日本人写真家としてただひとり解放区に潜入し、解放区の人々と交わるにとどまらず、当時の解放戦線副議長、フェン・タン・ファットと会見したという稀有な経験の持ち主であった。1972年に北ベトナムを取材したとはいえ、解放戦線の取材はついにしえなかった石川が、米国批判の精神を堅持し続けたことは、平敷の述べるとおり、日本人写真家にあっては例外的だったのだろう。石川の揺るぎない批判精神が、1938年の沖縄に生を享けた事実を根を持つことは疑いようがない。

石川は、被写体に相対した自分自身の心が動かされなければ、作品を見る者にも感動は生まれないという信念の下に、写される人の怒りや悲しみや喜びを共有しえた瞬間にシャッターを切るという。そして、戦争写真家として何より撮影したいと思うのは、戦火の下で生活する人々の表情であると明言している<sup>82)</sup>。平敷によれば、石川よりも巧みな写真家はベトナムに何人もいたが、石川ほど真剣に長期に亘るライフワークとしてベトナム戦争あるいはベトナムに取り組んだ者は皆無であるという<sup>83)</sup>。石川のそのような取り組みを可能にしたのは、持ち前の強い批判精神と温かい共感性であることに疑問の余地はない。それらは石川において表裏一体のものであろうが、その源泉を求めるならば、それは中国と米国そして日本に苦しめられた歴史をベトナムと共有する沖縄の出自に見出されるほかはない。

## おわりに

報道写真というものを、岡村昭彦は明快に「写真家の思想と史観によってエッセイを綴ること」と捉えていた。岡村より9年若く、ベトナム戦争取材開始時に26歳であった当時の石川文洋には、

おそらくそのような認識はなかつただろう。1971年に刊行された自らの写真集の「あとがき」において石川は、「せっかくベトナムで取材する機会を得ながら、ベトナムの人が受けている苦しみを思うように表現することのできない未熟さに苛立ちを感じます。まして文章ではとても表現することができません」と記している<sup>84)</sup>。

ここに窺われる石川の煩悶は、当時なお戦火に苦しむベトナムの人々に寄せる思いの痛切さに発していることはいうまでもない。ベトナムにあり通ずる苦難の歴史を辿ってきた沖縄に、日中戦争勃発の翌年に生を享けた石川が、その後抱かざるを得なかつた切実な思いとともにシュートし続けたベトナムの作品群は、地上に戦禍の絶えないかぎり見つめ続けられねばならないだろう<sup>85)</sup>。

## 註

- 1) 以下の数字データは、主として、石川文洋、『ベトナム 戦争と平和』、岩波新書、2005年、i頁、および、同、『戦場カメラマン』、朝日文庫、1986年、160頁によるが、その後の石川の調査結果私信により一部訂正してある。
- 2) 石川文洋、『戦場カメラマン』、250頁。
- 3) 生井英考、『ジャングル・クルーズにうってつけの日』、ちくま学芸文庫、1993年、509頁（単行本初版の刊行は、筑摩書房、1987年）。
- 4) 石川文洋、『戦場カメラマン』、333頁。
- 5) 伊奈信男、『写真に帰れ』、ニコン・ニコールクラブ、2005年、344頁。
- 6) 桑原史成、『報道写真家』、岩波新書、1989年、4頁。
- 7) 飯沢耕太郎ほか、『日本写真史概説』、岩波書店、1999年、89頁。
- 8) 岡村昭彦、「嶋元につづく若い人々のために」、嶋本啓三郎、『彼はベトナムで死んだ』、読売新聞社、1972年、118頁。
- 9) 石川文洋、『報道カメラマン』、朝日文庫、1991年、565頁以下。
- 10) 福島辰夫、『写真を発見する世界』、窓社、2011年、128頁。
- 11) 石川文洋、『戦場カメラマン』、958頁。
- 12) United Press Internationalの略称。1907年創立の米国の通信社。
- 13) Pan-Asia Newspaper Allianceの略称。1949年に香港に創立され、1963年、東南アジア地域の各支局は、それぞれの国で法人化された。PANA東京は、1986年、時事通信社の子会社となった。
- 14) 岡村昭彦、前掲論文、128頁。
- 15) 生井英考、前掲書、169頁以下。
- 16) 石川文洋、『戦場カメラマン』、419頁。
- 17) 石川文洋、同上、304頁以下。
- 18) 石川文洋、同上、915頁。
- 19) ティム・ページ、「追悼」、ホースト・ファース、ティム・ページ編、『レクイエム』、集英社、1997年、329頁。
- 20) 石川文洋、『戦場カメラマン』、922頁。同、「報道カメラマンの『戦場』」、澤田教一、酒井淑夫、二人のピューリッツァー賞カメラマン「戦場」写真展」、共同通信社、2002年、15頁。亡くなった米国人写真家は21名、南ベトナム解放戦線および北ベトナムのジャーナリストは72名にのぼるといふ。
- 21) 石川文洋、『報道カメラマン』、512頁。
- 22) 石川文洋、『戦場カメラマン』、93頁。
- 23) 石川文洋、同上、910頁。
- 24) 生井英考によれば、石川がしばしば従軍していた南ベトナム政府軍の前身は、ベトナム共和国陸軍（Army of the Republic of Viet Nam）であった。ARVNは、バオ・ダイ帝の下でホー・チ・ミンの率いるベトミン共産軍と戦った1949年創設の軍隊である。1955年に親米的なゴ・ディン・ジエム政権の下で再編され、戦争の終結した1975年に解体された。生井英考、前掲書、547頁。
- 25) 石川文洋、『戦場カメラマン』、171頁。
- 26) 石川文洋、同上、303頁。
- 27) 石川文洋、同上、171頁。
- 28) 石川文洋、同上、155頁。同、『石川文洋のカメラマン人生一貧乏と夢』、樫出版社、2003年、116頁。同、「戦争報道での残酷写真」、日本大学法学部編、『ジャーナリズムと写真』、2006年に所収。この最

後の資料の末尾に付された編集部註によると、米  
国大使館からの圧力で、佐藤栄作自民党内閣の官  
房長官・橋本登美三郎がTV局に電話をかけたとい  
う。

- 29) 石川文洋、『報道カメラマン』、583頁。
- 30) 中野好夫・新崎盛暉、『沖縄戦後史』、岩波新書、  
1976年、15頁以下。
- 31) 石川文洋、『戦場カメラマン』、251頁。
- 32) 石川文洋、同上、330頁。
- 33) 中野・新崎、前掲書、8頁。
- 34) 石川文洋、『戦場カメラマン』、30頁。
- 35) 石川文洋、同上、43、158、310頁。米兵数は最も  
多い時期には55万を越えた。
- 36) 石川文洋、同上、570頁。
- 37) 生井英考、前掲書、16頁以下。
- 38) 石川文洋、『戦場カメラマン』、429頁。
- 39) 石川文洋、同上、203頁以下。
- 40) 石川文洋、同上、116頁以下
- 41) 生井英考、前掲書、139頁。
- 42) 生井英考、同上、60頁以下。18歳の兵士は3092名  
が死亡し、17歳の兵士も12名亡くなっている。
- 43) 生井英考、同上、371頁。
- 44) 生井英考、同上、494頁。
- 45) 石川文洋、『戦場カメラマン』、221頁以下。
- 46) 石川文洋、『戦場カメラマン』、225頁以下。
- 47) 生井英考、前掲書、449頁。
- 48) 生井英考、同上、531頁。石川文洋、『戦場カメラ  
マン』、390頁。
- 49) 石川文洋、『戦場カメラマン』、402頁。
- 50) 石川文洋、同上、120頁。
- 51) 石川文洋、同上、92頁。
- 52) 石川文洋、同上、210頁。
- 53) 石川文洋、同上、116頁以下。
- 54) 石川文洋、同上、133頁。
- 55) 石川文洋、同上、504頁。
- 56) 生井英考、前掲書、401頁以下。
- 57) 平敷安常、『キャパになれなかったカメラマン  
(上)』、講談社文庫、2012年、488頁（単行本初版  
の刊行は、講談社、2008年）。
- 58) 石川文洋、『写真報告 戦争と民衆』、朝日新聞社、  
1971年、3頁。
- 59) 石川文洋、同上、15頁。
- 60) 生井英考、前掲書、490頁。
- 61) 石川文洋、『戦場カメラマン』、340頁。
- 62) 石川文洋、『写真報告 戦争と民衆』、33頁。
- 63) 石川文洋、同上、76頁。
- 64) 石川文洋、『ベトナム 戦争と平和』、20頁。なお、  
『写真報告 戦争と民衆』と同一のショットは、同、  
『写真は心で撮ろう』、岩波ジュニア新書、1999年、  
18頁にも所収。
- 65) 石川文洋、『戦場カメラマン』、184頁。
- 66) 平敷安常、前掲書、219頁。
- 67) 石川文洋、『写真報告 戦争と民衆』、80頁。
- 68) 石川文洋、『ベトナム 戦争と平和』、24頁以下。
- 69) 石川文洋、『写真報告 戦争と民衆』、122頁。
- 70) 石川文洋、同上、130頁。
- 71) 石川文洋、同上、134頁。この作品は、同、『戦  
場カメラマン』、220頁にも収録され、そこには、  
「米兵たちは農村を徹底的に攻撃した。しかし、避  
難してきた農民にはやさしくしている風景も見ら  
れた。1967年、タイニン省」とある。
- 72) 石川文洋、『写真報告 戦争と民衆』、149頁。
- 73) 石川文洋、同上、157頁。同、『戦場カメラマン』、  
274頁には、「切断された足の間にある少女の幼い  
性を見たとき、私は彼女の悲劇をいちだんと強く  
感じた」とある。
- 74) 石川文洋、同上、164頁。
- 75) 石川文洋、同上、167頁。
- 76) 石川文洋、同上、183頁。
- 77) 石川文洋、同上、189頁。
- 78) 石川文洋、同上、191頁。
- 79) 石川文洋、『戦場カメラマン』、164頁。
- 80) 石川文洋、同上、428頁。
- 81) 平敷安常、前掲書、213頁。
- 82) 石川文洋、『ベトナム 戦争と平和』、68頁。
- 83) 平敷安常、前掲書、219頁。
- 84) 石川文洋、『写真報告 戦争と民衆』、251頁。
- 85) 立教大学アメリカ研究所は、2003年12月20日に、

「アメリカの報道写真—キャバ、ベトナム、9.11」  
というシンポジウムを開催し、そのメイン・シン  
ポジストに石川文洋氏をお迎えした。本稿を作成  
するに当たり、9年ぶりに石川氏にご連絡したとこ  
ろ、立教大学社会学部・生井英考教授の講義科目  
でご講演のため、2012年12月4日に来校される  
ことを知った。事前に貴重な資料をお送り下さり、  
ご来校時も快く質問にお答え戴いた石川文洋氏に  
心からの感謝を表したい。また、9年前のシンポジ  
ストのおひとりであり、石川氏との再会の機会を  
作って下さった生井氏に御礼申し上げる。

